

事をみの字を略して云也、古は兄君、伯父君など、いひし也、

〔古事記上〕爾速須佐之男命略○中 爾答詔、吾者天照大御神之伊呂勢者也、自伊下三字以音

〔古事記傳九〕伊呂勢、中卷下卷には伊呂兄と書り、同母兄を云なり、伊呂とは、本愛しみ親しみて

云言なり、此事中卷浮穴宮段常根津日子伊呂泥命の下傳廿一のに委く云り考ふべし、師賀茂  
に、伊呂は家等にて、万葉十四東歌に、伊波呂と云るこれなり、さて同母の子は、母と共に同家に  
在る故に、伊呂母伊呂兄伊呂弟伊呂姉と云なりとあり、是ぞ古のさまをよく得られたるもの  
か、と非ざりけり、ひしさて此命は御弟なれども、男命なる故に兄と詔ふなり、其由は上傳六の  
云り、上に天照大御神の大御言にも我那勢命とあり、

〔古事記上〕兄八島士奴美神、娶大山津見神之女名木花知流以音比賣生子、布波能母遲久奴須奴神

〔古事記傳九〕兄は御阿邇と訓べし、書紀神代卷に兄弟又垂仁の卷に御子たちの次第を云處に

第一をも阿爾とよめり、又仁賢卷にも異父兄弟など訓り、此稱、中昔の物語どもにも多かり、今  
思ふめれど、言のさまいと古し、和名抄に兄古乃加美、又母兄波良比止豆乃古乃加美とあれど  
も、古能加美と云は、本第一子に限る稱なり、魁帥なども其中の長を云、官司にては長官を加美  
と云り、然るを必しも第一に限らず、ひるく弟に對へては、兄字を訓るから轉る後、のこ  
となるべし、されば書紀應神卷清寧卷などに、長子に訓るはよく當れり、此は先に三柱女神坐  
せば、長子にはあらざれば叶はず、又伊呂勢伊呂泥などは、同母のを云稱なれば、是も此には叶  
はず、然ればたゞ勢と云ぞ、ひるく兄字によく當れ、ど、此は然訓むも語調よろしからずなむ、

〔古事記中〕故天皇崩後、其庶兄當藝志美美命娶其嫡后伊須氣余里比賣之時、將殺其三弟而謀之

問略○中 於是其御子聞知而驚、乃爲將殺當藝志美美之時、神沼河耳命曰其兄神八井耳命略○下

〔古事記傳二十〕兄は伊呂勢と訓べし

〔古事記開中〕御真木入日子印惠命崇者、治天下也、其兄比古由牟須美王之子、大筒木垂根王略○下

〔古事記傳二十二〕其兄、此兄は美古能加美と訓べし、此は五柱皇子だちの中の第一と云意なる

べければなり、凡て古能加美は子上と云ことにて、子等の中の第一なる一人を云稱なり、又其  
を、印惠命を指て申せりとせば、御阿邇と訓べし、阿邇と云は、第一の一人には限らぬ稱なり、何  
れにまれ、此の兄を、イロセ、イロエなど訓るは非なり、いるせなどは、同母の兄を云稱なれば、な